

生活していくことができる具体的な場所、ノマドを支える場所の存在を明らかにするとともに、ノマドとして移

動できる機会・環境についてあらゆる角度から明らかにしていく必要がある。

都市高齢者の孤立化を防止する 地域見守り支援事業の実態と課題 —東京都豊島区の見守り支援事業担当の活動に注目して—

渡邊 斉子

本研究では、都市高齢者の孤立化に焦点をあて、東京都豊島区を対象地域に、新たに2011年に地域包括支援センターに併設された見守り支援事業担当の活動に注目することで、地域見守り支援事業の実態と課題を明らかにし、高齢者の孤立化を防ぐ地域見守りネットワーク構築のための課題やその可能性について考察した。そのため、見守り支援事業活動担当への詳細な聞き取り、訪問活動への同行や広報活動の観察、資料調査等を行った。

研究の結果、見守り支援事業担当は、豊島区の見守り活動における「入口」の役割をもつという位置づけのもと、訪問活動による高齢者の実態把握と同時に、広報・啓発活動による地域見守りの仕組みづくりを行うことで地域の見守りの目を養う「気づき」という役割、そして孤立の可能性の高い高齢者を見守りへと「つなぐ」役割を果たしていることが明らかとなった。さらに、「つ

なぐ」という役割に伴い、見守り支援事業担当が、一時的・応急処置的に、見守りの必要があるが社会資源につながらない人を、実質的に見守る機能も担っていることが明らかとなった。この機能は、見守り支援事業担当の本来の役割を越えたものではあるが、見守りに拒否的な高齢者の孤立を防ぐ上で非常に重要な役割を果たしていた。

高齢者の孤立化が社会問題化する現在、それを防ぐ地域見守りネットワークの構築に向けて、地域で孤立する高齢者を発見しつなげること、そして見守りを拒否する高齢者を孤立させないために、対象者との信頼関係作りと綿密な関わりを継続すること、またそれと同時に、地域への地道な意識化による地域で互に見守り見守られるという仕組みづくりを継続していくことが重要であると考えられる。

銀座に於ける対外国人観光客の多言語環境について —店舗の多言語対応から—

呉 艶紅

日本は観光立国を掲げ、2003年にビジット・ジャパン・キャンペーンをスタートし、対外日本旅行を広報し、訪日旅行者を誘致しながら、玄関口で旅行査証の門限を下げ、対内観光地の受け入れ環境を整備するとのステップを踏んでいる。このような背景があり、近年訪日旅行者の数が増えつつある。特に銀座を訪れる人が一番多いようである。異国を旅する時に一番直面する問題は言葉の壁であり、言語環境の整備が重視されている。しかし、

多言語対応の重要性を強調されつつも、全体の進み具合についての把握、観光客にとってある地域の多言語対応状況の提示といったものは見当たらなかった。従って、本論文は旅行者の需要から着手し、供給側の多言語環境を調べることを目的とする。

本調査で、銀座に於ける外国人に対する多言語対応について、特定の業種にアンケート調査(272店舗/5556店舗)を通じて調べた結果を業種別と言語別にまとめ、更